

『私たちの幸せな時間』のユジンは、金の力で地位を買い、また地位のある女を妻にする(こと)によって自己の地位を獲得しようとする男性社会に厭世を感じた。ボン・ジュノ監督「フランダースの犬(日本版タイトル)「ほえる犬は嘯まない」に登場する大学講師も妻の退職金で教授の椅子を買った。権威に対する痛烈な批判が韓国映画には通底している。

性が欲得や、出世の手段であるという現実に対する痛烈な厭世を示した小説に金承鉦(キム・スンオク)の「霧津紀行」がある。

金承鉦は李明博(イ・ミョンバク) 現大統領と同じく1941年大阪生まれだ。彼らは、李承晩(イ・スンマン) 政権を倒した4・19学生革命の時の主役世代というところで、「4・19世代」と呼ばれる。

金承鉦は、日本の敗戦直

前に帰国して順天(スンチョン)に住むが、1948年の麗水順天(ヨス・スンチョン)事件で父を失う。ソウル大学仏文科の学生時代から、金芝河(キム・ジハ)らと親交があり、金芝河が長編詩『五賊』で反共法に問われる「五賊」筆禍事件」が起きると、救援に

まわったことも知られてい

## 第2回

# 不条理な社会に個人の厭世は対峙しえるか

## 金承鉦 「霧津紀行」



金承鉦氏

1984年頃金承鉦が日家の人だった。0から70年代を代表する作家の一人だった。

1984年頃金承鉦が日本に来たとき、筆者らとともに東京や横浜を遊覧したことがある。しかし198

津へ帰郷する話だ。暗い記憶しかない霧津は霧が深いほかに名物もない地方だった。学生時代、朝鮮戦争のときは部屋に朝鮮戦争のときの待ち合わせに行くもって隠れていた。「私」は霧津に対する連想の大半は暗い青年時代だった。

「私」は中学の同窓で今は税務署長に出世した同級生の家の集まりを訪ね、音楽教師のハ・インスキを知る。インスキに恋している後輩の朴は、彼女が俗物たちの中で流行歌を歌う姿に

たが、残念ながら観ていない。1960年代という朴正熙軍事独裁政権下の高度経済成長を担うエリートサラリーマン像は、社会の不条理を反映している。分断が招いた不条理な社会における人間像の表出というのが金承鉦のテーマだったのだろうか。

不条理な社会からの再生が、無惨にも暴力で打ち砕かれた現実にも耐えきれなかったのだろうか。ペンを絶った金承鉦は、東京湾を巡る遊覧船「赤い靴号」の甲板で、「きみは外交官になれば良い」と言った。後で知ったことだが、彼の若いときの夢が外交官になることだったらしい。80年代の日本は軍事独裁政権下の知識人の目には幸せな国に映ったのだろ。

『霧津紀行』は、金承鉦が1964年まで大學生のときに発表した出世作であった。一躍注目された彼は、翌5年には『ソウル、1964年冬』で韓国文壇の権威ある東仁文学賞を受賞した。196

0年の光州事件以後、彼は小説を書くのを止めていて、このときは『健康時代』という月刊誌の主宰という名刺を持っていた。敬虔なクリスチャンだった彼は食事の前の祈りが長く、何やらつぶつぶと唾を飛ばしながら祈っていた。今も修道生活を続けているのか消息は分からない。

耐えられず先に帰ってしまった。私は最後まで残ったインスキを送って行くことになる。インスキは退屈な霧津が厭でソウルに戻りたがっている。

翌日、霧雨のなか暮参りに向かった私は途中女性の自殺死体と遭遇した。突然「私」はこの女が自分の一部であるかのように感じられた。(叔母の)家に帰ると税務署長の趙からのメモが残っていたので税務署を訪ねる。趙はインスキと関

こでも彼を待っていた友人たちの不幸な暮らしに直面する。麗水あたりに旅行にでかけるが、そこで出会ったサーカス団も貧しく、夜には性を売ることを生業としている。サーカス団自体も解散しようとしている。団員の一人曲芸師はわざと落ちて死を運ぶ。一緒に死んだ友人は団員の女性と結婚を約束し、彼女を故郷に送り届けてから帰るが、後に殺されてしまっ

『霧津紀行』は岩波書店「韓国短編小説選」に収録されている。その他の翻訳としては、『ソウル、1964年冬』が新潮社「韓国現代文学13人集」に、「秋の死」が「新潮社」韓国現代短編小説」に収録されている。金承鉦に関連した批評として、藤井たけし「一切れて繋がる―朝鮮戦争における「残された人々」」(『現代思想』2003年9月号)は、カナファーニ、金時鐘とともに論じていて興味深い見解を示している。

# 小説と映画

## 行ったり来たり

―不急順不同、起承転結なし(主に韓流)

林 浩治

「霧津(ムジン)紀行」は、製薬会社の幹部社員である「私」が、妻の美家の力で出世がほぼ決まり、霧

係しようとしたが失敗し、家柄が酷い女なので結婚の対象ではないと言った。「私」は夕べ約束したのでインスキとの待ち合わせに行く。

「私」たちは、「私」が昔母が死んだあと一年だけ過ごした海辺の家を訪ねていった。その頃「私」の書いた手紙には「淋しい」という単語が容易に見いだされた。

不条理な社会で足掻く人間像は他の作品にも現れる。『幻想手帳』(1962年)では、ソウルで無為に過す貧しい大学生が恋人を自殺に追い込んで、故郷に帰るが、そこで彼を待っていた友人

「霧津紀行」は若波書店「韓国短編小説選」に収録されている。その他の翻訳としては、『ソウル、1964年冬』が新潮社「韓国現代文学13人集」に、「秋の死」が「新潮社」韓国現代短編小説」に収録されている。金承鉦に関連した批評として、藤井たけし「一切れて繋がる―朝鮮戦争における「残された人々」」(『現代思想』2003年9月号)は、カナファーニ、金時鐘とともに論じていて興味深い見解を示している。